

K-62/

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第10集

# 市内遺跡発掘調査報告書(2)

さすのわき  
座須脇遺跡の調査

ながもて  
長面遺跡の調査 他

1994年

長井市教育委員会

# 市内遺跡発掘調査報告書(2)

さすのわき  
座須脇遺跡の調査

ながもて  
長面遺跡の調査 他

1994年

長井市教育委員会



## 序

この報告書は、今年で2年目の調査となった市内遺跡発掘調査の結果をまとめあげたものであります。

昭和57年度に西山山麓一帯の遺跡詳細分布調査を皮切りに、市内各地を丹念に調査し、貴重な成果をあげ、さらに平成3年度には、本市の遺跡を網羅した「長井市遺跡地図」を刊行するに至っております。

しかし、近年時代の要求に伴い、遺跡が散在する地域にも開発がおよぶようになったため、事前に開発関係機関と充分連絡をとりながら調整をとっており、それをまとめあげたのが本報告書であります。関係機関のご理解とご協力なしでは、とうてい達し得ることではありません。ご協力いただきました多くの方々に心からお礼を申し上げます。

また、調査の結果、貴重な遺跡も見つかっております。この度は、伊佐沢地区の遺跡が調査の対象となりましたが、なかでも座須脇遺跡と愛宕山館で貴重な成果を得ることができました。座須脇遺跡では、県内でも数少ない縄文時代前期初めの土器が、しかもほぼ完全な形で復元されました。愛宕山館遺跡は戦国時代の山館で、その範囲が東西700m、南北300mにおよぶ大規模なものであることが判明しました。

開発事業と遺跡保護の調整を図ることは、とりもなおさず、長井市の歴史の探究にもつながり、時には歴史の1ページに書き加わるような発見にも遭遇しかねません。

開発と遺跡保護は背中合わせのものですが、互いに調整をとりながら埋蔵文化財の保護につとめる所存であります。

最後になりましたが、この度の調査に関係各位ならびに調査に参加していただいた地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いに存じます。

平成6年3月

長井市教育委員会

教育長 鈴木泰助



## 例　　言

- 1 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成5年度以降開発事業との調整ならびに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。
- 2 事業期間は平成5年5月10日から平成6年3月31日までである。

- 3 調査体制は次のとおりである。

調査員 岩崎義信（長井市教育委員会生涯教育課文化係長）

調査補助員 神尾昭利（長井市教育委員会生涯教育課文化係主任）

調査参加者 飯沢宇造 飯沢 茂 飯沢忠吉 飯沢忠介 飯沢半兵衛 飯沢兵吉  
大沼 正 後藤一郎 小松慎一 佐藤七男 佐藤友次 佐藤春雄 斎藤定男  
斎藤忠助 佐原吉美 鈴木吉巳 孫田晋助 孫田八郎 高世重右エ門  
高橋辰巳 那須末吉 那須惣左エ門 平田健二郎 山口久吾 山口貞七

事務局長 竹田 欣助（長井市教育委員会生涯教育課長）

事務局次長 沼沢久四郎（長井市教育委員会生涯教育課次長）

事務局員 岩崎 義信（長井市教育委員会生涯教育課文化係長）

神尾 昭利（長井市教育委員会生涯教育課文化係主任）

- 4 本調査にあたっては、次の方々のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

山形県教育庁文化課、（財）山形県埋蔵文化財センター、致芳地区史談会、西根史談会、伊佐沢郷土史会、芦沢地区、中伊佐沢地区、上伊佐沢地区、長井市古代の丘資料館

- 5 挿図・付図の縮尺はスケールで示した。遺物の写真的スケールは5cmを示す。

- 6 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、挿図・図版の作成は大場純子・竹田シゲ子の補助を得た。

## 目 次

I 調査に至るまで .....	1
1 調査の目的 .....	1
2 調査の方法 .....	1
3 調査の経過 .....	1
4 新たな遺跡・遺物の発見について .....	4
II 調査の概要 .....	
1 館町南地区 .....	5
2 成田地区 .....	6
3 館久保地区 .....	7
4 新田遺跡 .....	9
5 五郎兵工屋敷遺跡 .....	11
6 長面遺跡 .....	13
7 座須脇遺跡 .....	17
8 遊館遺跡 .....	27
9 八幡館遺跡 .....	29
10 愛宕山館遺跡 .....	31

## 挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図 .....	3
第2図 館町南地区調査概要図 .....	5
第3図 成田地区概要図 .....	6
第4図 館久保地区概要図 .....	7
第5図 新田遺跡概要図 .....	9
第6図 五郎兵工屋敷遺跡・中嶋遺跡概要図 .....	11
第7図 長面遺跡概要図 .....	14・15
第8図 座須脇遺跡概要図 .....	17

第9図	検出遺構平面図	18
第10図	土器実測図・土器拓影図	21
第11図	土器拓影図	22
第12図	土器拓影図	23
第13図	廻館遺跡縄張図	28
第14図	八幡館遺跡縄張図	30
第15図	愛宕山館遺跡縄張図	32・33

## 図 版 目 次

図版1	新規発見の遺跡・遺物	4
図版2	館久保地区	8
図版3	新田遺跡	10
図版4	五郎兵工屋敷遺跡・中嶋遺跡	12
図版5	長面遺跡遠景	13
図版6	長面遺跡	16
図版7	座須脇遺跡	19
図版8	座須脇遺跡出土遺物	24
図版9	座須脇遺跡出土遺物	25
図版10	座須脇遺跡出土遺物	26
図版11	廻館遺跡遠景	27
図版12	八幡館遺跡遠景	29
図版13	愛宕山館遺跡遠景	31
図版14	愛宕山館遺跡	34

付表1	埋蔵文化財ヒアリングおよび遺跡台帳整備に係る調査一覧表	2
付表2	調査工程表	2

# I 調査に至るまで

## 1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ約200箇所の遺跡を把握した。しかし近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業と調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的とした調査である。

また、周知の遺跡は表面踏査で確認したものがほとんどであるため、遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにするために試掘調査を行い、遺跡台帳の整備にあたった。

## 2. 調査の方法

### (1) 現地調査

遺跡として登録されていない地域でも、事業実施区域が広範囲におよぶ場合は現地調査を実施し遺跡の有無を確認し、開発事業と遺跡保護の調整にあたった。

### (2) 試掘調査

周知の遺跡が事業実施区域に含まれる場合や、周知の遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図った。

また、遺跡台帳を整備する目的から、これまで表面踏査から推定した遺跡について坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺跡内容の補筆にあたった。

### (3) 測量調査

中世の館跡など現況に遺構の形態が現れている遺跡を対象に測量調査を行い、開発事業計画と遺跡保護の調整にあたると同時に、遺跡台帳の整備の目的から測量調査を行い遺跡内容の補筆にあたった。

## 3. 調査の経過

長井市教育委員会ではこれまで実施してきた分布調査から遺跡地図を作成した。この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画されている開発事業にさきがけて埋蔵文化財に係るヒアリングを実施している。その結果を受けて、開発事業との調整を図るために必要に応じ上記の調査を実施した。

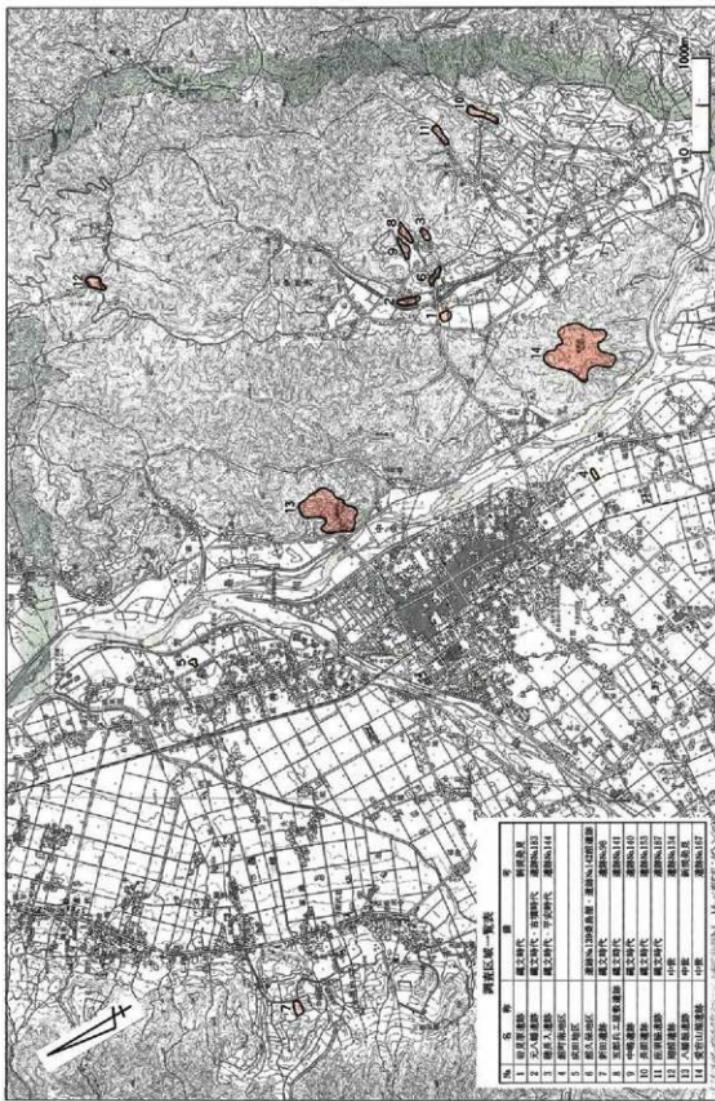
なお、ヒアリングと調査の内訳は次のとおりであり、現地調査の行程は次のとおりである。

**埋蔵文化財ヒアリングおよび  
遺跡台帳整備に係る調査一覧表**

事業種別	遺跡名	調査区分	備考
大規模造成事業に係るもの	館町南地区	試掘調査	
	成田地区	試掘調査	
	新田遺跡	試掘調査	
道路工事に係るもの	館久保地区	試掘調査	桑島館・館遺跡
遺跡台帳整備に係るもの	五郎兵工屋敷遺跡	試掘調査 測量調査	
	中嶋遺跡	試掘調査 測量調査	
	長面遺跡	試掘調査 測量調査	
	座須脇遺跡	試掘調査 測量調査	
	廻館遺跡	表面踏査	縄張図作成
	八幡館遺跡	表面踏査	縄張図作成
	愛宕山館遺跡	表面踏査	縄張図作成

**調査工程表**

	平成5年 11月	12月	平成6年 1月	2月	3月
試掘調査	10 	14			
測量調査	17 	14			
報告書作成		15 			31



第1図 調査箇所位置図

#### 4. 新たな遺跡遺物の発見について

##### (1) 岩見原遺跡

長面遺跡の試掘調査の折り、聞き取り調査で明らかになった遺跡である。

遺跡は逆川右岸の河岸段丘上に位置し、伊佐沢地区公民館の西側にあたり、昭和50年代の基盤整備で出土したものである。縄文土器十数点と土偶が採集されている。

土器は大型の深鉢と推定され、ほとんどが体部破片で器壁が厚くLRの縄文が継ぎに施されている。土偶は右胸部から腕にかけての部分であり、縁辺に沿って沈線が施されている。縄文時代中期の所産と考えられる。周辺一帯は大規模な基盤整備事業がおこなわれているが、逆川の河岸段丘上には上の台遺跡をはじめ多くの遺跡が点在しており、現在でも土器や石器の出土を耳にする。多くの遺跡が土中に眠っているものと思われる。



岩見沢遺跡近景



岩見沢遺跡出土遺物 平田健二郎氏蔵

##### (2) 元八幡遺跡

本遺跡は昭和49年、山形県が実施した分布調査で発見された。当時は土師器が採集され古墳時代の遺跡として登録されていたが、この度宅地造成の際石棒が出土したことから縄文時代の遺跡であることが確認された。ただ、遺跡の地形が昭和40年代とはだいぶ変わってきたため遺跡の範囲の再確認が必要と思われる。



元八幡遺跡出土遺物(長さ49.3cm) 佐原吉美氏蔵

##### (3) 穂長入遺跡

本遺跡は昭和62年、本市教育委員会が実施した分布調査で発見された。当時は丘陵の南斜面から須恵器片が採集され平安時代の遺跡として登録されていた。しかし、この度の聞き取り調査から丘陵西側の畑からも遺物が出土することが判明したため現地踏査を行ったところ石窓や剥片を採集した。したがって穂長入遺跡の時期は縄文時代・平安時代となる。



穂長入遺跡採集遺物

図版1 新規発見の遺跡・遺物

## II 調査の概要

## 1. 館町南地区

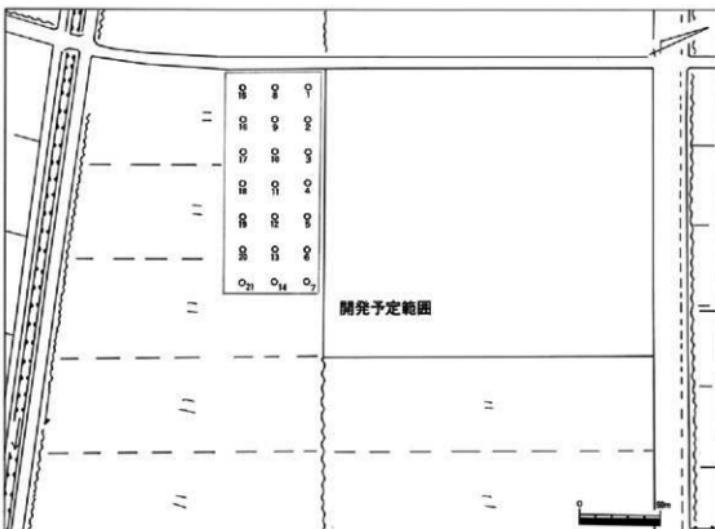
最上川の左岸、国道287号線の西側一帯の水田地帯に位置する。当該地の南西約600mの小丘陵上には縄文時代中期の館之越遺跡があり、多数の土器や石器が採集されている。また、同じ南西部にある長井市立南中学校のグランド北側からも、以前須恵器が出土したという情報もある。

この度、当地域に雇用促進住宅の駐車場用地造成が計画されたため、事業計画との調整を図る目的で実地調査を実施した。

造成予定地に  $1 \times 1$  m のテストピットを東西 20 m、南北 10 m の間隔で設定し、遺構・遺物の検出につとめながら地山まで掘り下げた。

調査の結果、テストピットの土層堆積は場所によって若干の搅乱は見られるものの、ほとんどが原位に乱れが観察されず、また遺構や遺物の検出もなかった。

したがって、当該地域には遺跡が及んでいないことが判明した。



## 第2図 館町南地区調査概要図

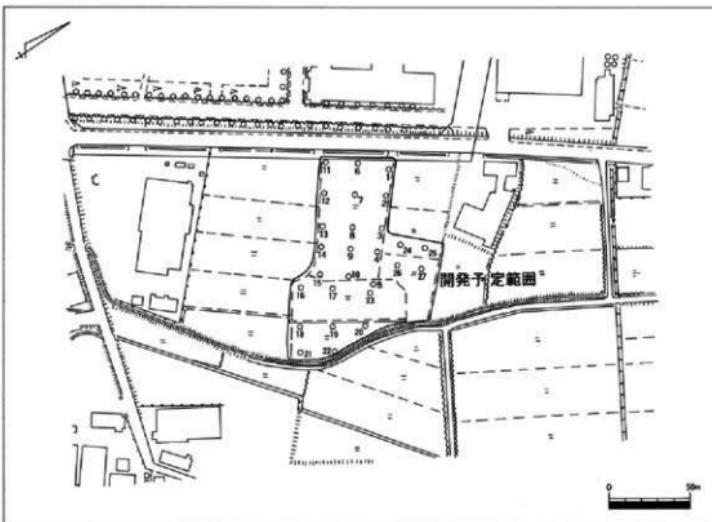
## 2. 成田地区

最上川左岸の河岸段丘上に位置する。一帯は長井北工業団地として近年その姿を変えつつある地域である。平成元年に当教育委員会が遺跡詳細分布調査を実施し、当該地域付近から中世の城館遺跡にかかるものや奈良・平安時代の土師器や須恵器を採集しており、河岸段丘上の遺跡群として捉えている箇所でもある。とくに城館遺跡においては、平地の館が狭い範囲に密集し昭和40年代の土地改良が行われる以前は、幅三間の屋敷堀が残っていたという。また、山形県指定の「正応二年の大日板碑」や「飯沢文書（文和五年より慶長十六に至る十通一巻）」が伝わっている。

この度、当地域に福祉施設の建設工事が計画されたため、事業計画との調整を図る目的で試掘調査を実施した。

開発予定範囲に  $1 \times 1$  m のテストピットを 20 m 間隔に 27箇所設定し、遺構・遺物の検出につとめながら地山層まで掘り下げた。

調査の結果、大部分のテストピットから客土層が検出され、土層には搅乱が見受けられた。また、遺構・遺物が検出されなかったことから、当開発区域には遺跡がおよんでいものと思われる。



第3図 成田地区調査概要図

### 3. 館久保地区

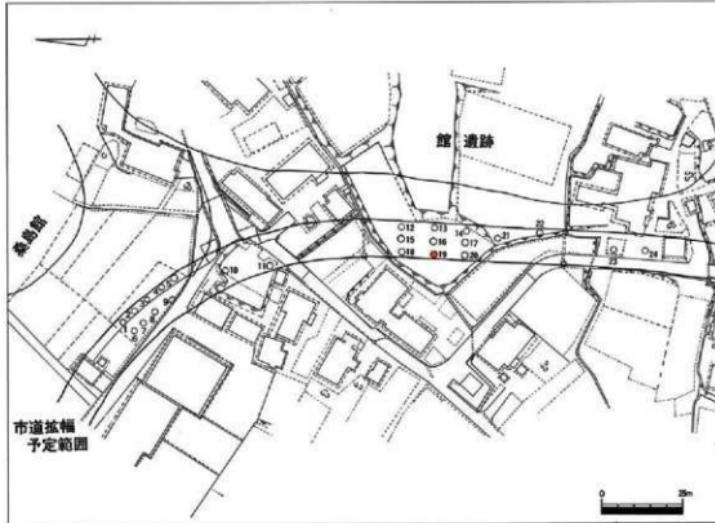
出羽丘陵の南端に位置する伊佐沢地区は昭和62年と63年に実施した遺跡詳細分布調査で、繩文時代・戦国時代の遺跡を中心に数多くの遺跡が見つかっている。桑島館は上伊佐沢に住む伊達の家臣桑島将監の居館と伝えられ、逆川に流れる小河川によって形成された河岸段丘上に位置する。館跡は東西100m、南北80mの範囲をもち、遺跡南西部には現在も館濠の一部が残っており戦国時代の名残をとどめている。また、遺跡東側にも空堀跡が残っていたが土地改良で埋没してしまい、現在は堀の一部分が残っているにすぎない。永禄13年、将監が妻お玉と子を亡くし供養するために建てたのが今日の玉林寺で、そこには「お玉の碑」が建っている。

館遺跡は玉林寺西側の河岸段丘上に位置する。昭和62年の遺跡詳細分布調査で見つかった繩文時代の遺跡である。

この度、両遺跡の付近を通る市道久保桜・芦沢線道路改良工事計画があり、遺跡におよぼす影響を見るため試掘調査を実施した。

開発予定地を4区に分割し、各区ごとに $1 \times 1$ mのテストピットを數ヵ所づつ設定し、地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。TP1~9地点では表面採集で剥片を採集したものの遺構・遺物は検出されなかった。また、TP12~20地点ではTP19で摺鉢片が出土したが、一帯は土地改良が行われた地域であり土層には搅乱や客土が見られ、遺構は検出されなかつた。

以上のことから、道路改良工事による遺跡への影響はないものと思われる。



第4図 館久保地区概要図



調査区近景



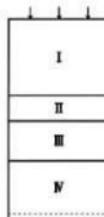
調査区近景



TP 19 土層断面



採集遺物



TP 18 土層柱状図

図版2 館久保地区

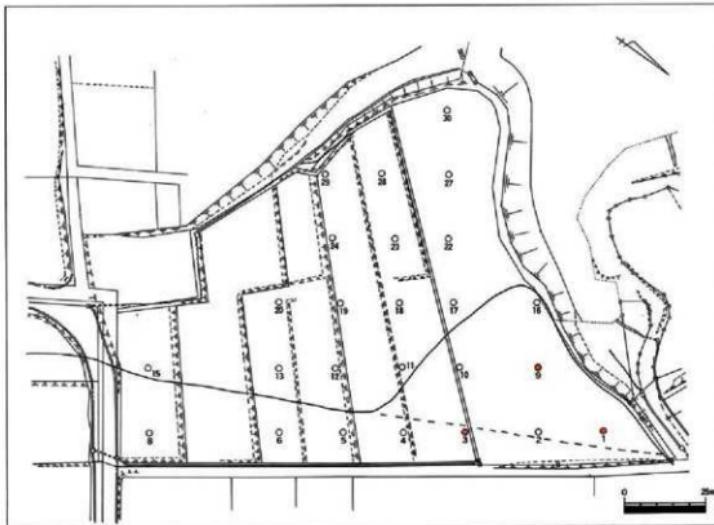
#### 4. 新田遺跡

新田遺跡がある西山山ろく一帯は、ふるくから遺跡が散在する場所として知られている。昭和57年、山ろくを縦貫する広域農道が計画されたため本市教育委員会が遺跡詳細分布調査を行い、あらたに37箇所の遺跡を確認した。その結果、新田遺跡は岩ヶ沢と久川にはさまれた広大な台地上に位置し、台地中央から北側にかけて多量の遺物が散布し、東西500m、南北400mの範囲におよぶ縄文時代の大遺跡であることが明らかになった。さらに、昭和59年に本遺跡中央部を南北に抜ける農道の改良工事が計画されたため、緊急発掘調査が行われ縄文時代早期の住居跡や土坑が検出された。

また、周辺一帯は長者屋敷遺跡・古代の丘資料館を中心とした遺跡公園づくりが進められ、野外展示や体験キャンプ場もあり新しいタイプの遺跡公園として全国から注目を集めている。

この度、林業構造改善事業による施設造成工事が計画されたため、事業との調整を資するため試掘調査を実施した。

開発事業予定地に1×1mのテストピットを20m間隔で30箇所設定し、地山層まで掘り下げ造構・遺物の検出にあつた。調査区域一帯は基盤整備事業がおこなわれており、TP17~29にかけては地山層までの土が削平されていた。しかし調査区域北西部ではTP1でピットTP3で造構が、さらにTP9からは剥片が出土した。これまで考えられていた新田遺跡の範囲がTP1から3およびTP9にかけて広がるものと推測される。したがって造成予定地うちの埋蔵文化財包蔵地の保存について協議の必要が認められる。



第5図 新田遺跡概要図



遺跡近景



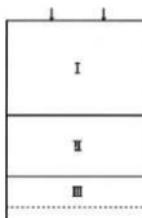
TP 1 ピット検出状況



TP 9 遺構検出状況



出土遺物



TP 9 土層柱状図

図版 3 新田遺跡

## 5. 五郎兵工屋敷遺跡・中嶋遺跡

両遺跡とも上伊佐沢地区の玉林寺から北東へ約300m、逆川支流の小河川によって形成された河岸段丘上に位置し、昭和62年の遺跡詳細分布調査で発見された。

この度は、遺跡台帳整備の目的で試掘調査を実施した。

五郎兵工屋敷遺跡は東西にのびる河岸段丘上にあり、西に緩やかに傾斜し畑地・水田となっている。以前土器や石器が出土した地点を中心に、 $1 \times 1\text{ m}$  のテストピットを15箇所設定し地山層まで掘り下げた。また、TP 5から遺物が出土したためTP 5を中心に $1 \times 10\text{ m}$  のトレンチ2本を交差する形で設定し、地山層まで掘り下げそれぞれ遺構・遺物の検出にあたった。しかし、トレンチから摩滅した土器片や碎片が散点出土したが、土層断面には客土や搅乱が観察され遺物包含層が特定されなかったことから、根菜類の栽培により地下深くまで耕作がおよんだものと推測される。

中嶋遺跡は、五郎兵工屋敷遺跡の沢を隔てた東西にのびる河岸段丘の上にあり、南北方向に緩やかに傾斜し畑地・桑畠となっている。以前分布調査で剥片を採集しているため、この度は遺跡の広がりを把握する目的で $1 \times 1\text{ m}$  のテストピットを25箇所設定し地山層まで掘り下げた。地表面からは石錐をはじめ数点の遺物を採集したものの、地山層までの堆積土が浅く土層には搅乱も見られ遺物包含層が特定されなかった。五郎兵工屋敷遺跡同様、根菜類の栽培により地下深くまで耕作がおよんだものと推測される。しかしTP 13から21の範囲は土層堆積も安定しており、遺構・遺物の検出はなかったものの遺跡の存在が充分に考えられる。



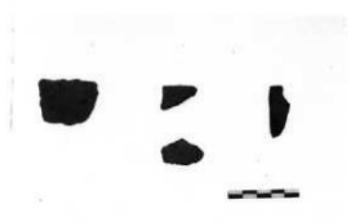
第6図 五郎兵工屋敷遺跡・中嶋遺跡



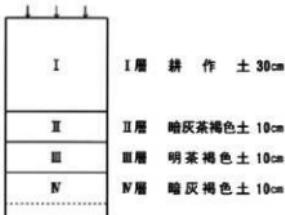
① 五郎兵工屋敷遺跡近景



② トレンチ穴掘状況



③ 出土遺物



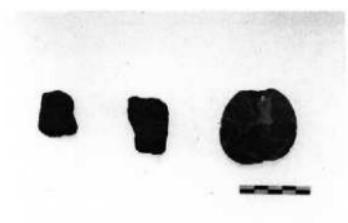
④ TP 9 土層柱状図



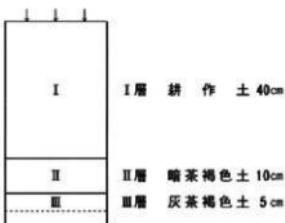
⑤ 中崎遺跡近景



⑥ 土層断面



⑦ 採集遺物



⑧ TP 17 土層柱状図

図版4 ①～④五郎兵工屋敷遺跡 ⑤～⑧中崎遺跡

## 6. 長面遺跡

芦沢地区から南東へ約700m、網代沢によって形成された河岸段丘上に位置する。本遺跡は昭和62年の遺跡詳細分布調査で発見され、多数の遺物が採集されている。

この度は、遺跡台帳整備の目的から試掘調査を実施した。

長面遺跡は東から西へ緩やかに傾斜する河岸段丘上にあり、東西350m×南北100mの範囲におよぶ。現在は水田・果樹の苗畑・畑地となっている。分布調査では遺跡の東側から多くの遺物を採集したので、本調査では遺跡の西側を中心に1×1mのテストピット117箇所、またTP64を起点とした1×10mのトレンチをそれぞれ設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、土層の堆積状況はおむね東側で深く西側で浅く、南側で深く北側で浅い傾向が見られる。TP1から32にかけては客土や搅乱層が見られ遺構・遺物は検出されず、大規模な基盤整備事業が行われた可能性がある。他のテストピットやトレンチでは一部客土や搅乱層が見られたが、遺物が出土し包含層も確認できた。TP40・44で遺構を確認し、TP42・44・63～73・88・108・110から碎片・スクレイバー等が出土した。また、TP86では表裏条痕文土器が出土した。

以上のことから、本遺跡は基盤整備事業により部分的には擾乱を受けているものの、遺物包含層も安定し、表裏条痕文土器の出土により縄文時代早期末から中期にかけての貴重な遺跡であることが確認された。



図版5 長面遺跡遠景



第7図 長田消防概要図



トレンチ実掘状況

I	1層 農作土 30cm
II	II層 灰褐色土 10cm
III	III層 黑褐色土 35~30cm (遺物包含層)
IV	IV層 暗茶褐色土 15cm
V	V層 灰褐色土 5cm

TP 69 土層断面図



表裏条痕文土器(表)

左 同(裏)



I トレンチ出土遺物



左 同



TP 71出土磨石



TP 88出土遺物



図版 6 長面遺跡

## 7. 座須脇遺跡

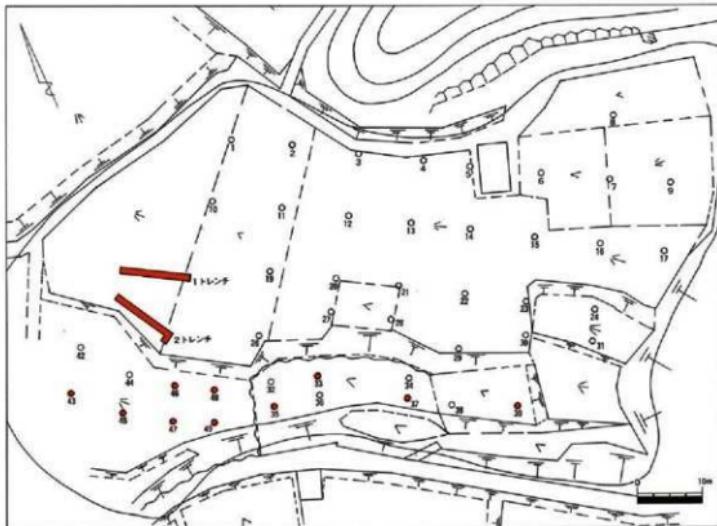
芦沢地区から東へ約400m入った河岸段丘上に位置する遺跡で、昭和62年の遺跡詳細分布調査で見つかった。逆川に流れ込む小河川によっ形成された河岸段丘は東から西へのび、北東から南西方向に緩やかに傾斜し2~3段の段丘面を有している。現在は畑地・果樹畠となっている。

この度の調査は、遺跡台帳整備の目的から試掘調査を実施した。

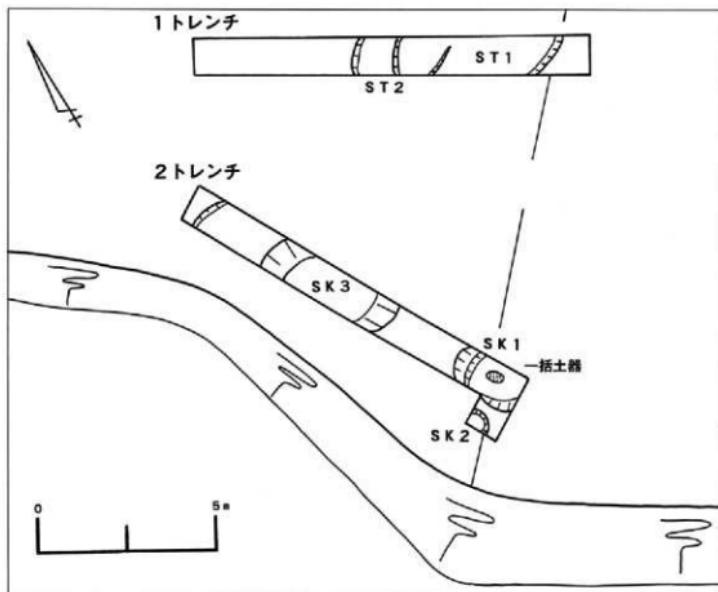
遺跡全体に1×1mのテストピット49箇所を設定し、遺構・遺物の検出につとめながら地山層まで掘り下げた。

当初、山間部の狭い河岸段丘に遺跡が立地しているため、規模からしてもキャンプサイト的な遺跡と思われた。しかし、TP18から石核がTP25からは縄文土器をはじめ、TP33・35・37・39・43・45~49と合計12箇所のテストピットから遺物が出土した。そのためTP18を基準に1トレンチを、TP25を基準に2トレンチを1×10mの規模でそれぞれ設定し遺構・遺物の検出にあたった。その結果、1トレンチからは住居跡が、2トレンチからは土坑2基を検出した。さらに1号土坑(SK1)の底付近から縄文前期の一括土器が出土した。

以上のことから、本遺跡は縄文時代前期初頭から中期にかけての集落跡であることが判明した。また、遺跡の範囲についても当初想定した区域より西側に広がりをもつかたちで確認された。トレンチ付近の土層は攪乱もなく遺物包含層が明確に残っており、数少ない縄文前期の遺跡として貴重な存在である。



第8図 座須脇遺跡概要図



1 トレンチ土層柱状図

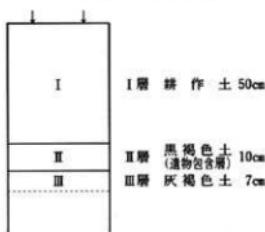


I層 灰茶褐色耕作土

II層 きめの細かいバサバサした土質。褐色粒子(鈾石?)を若干含む。本層中位から遺物が出土し、下位から遺構の落込みがはじまる。

III層 土質はII層に似るが径2~3mmの砂粒と褐色粒子を多量に含むしまりがありかたい土質。

2 トレンチ土層柱状図



I層 灰茶褐色耕作土

II層 きめの細かいバサバサした土質。本層中～下位にかけて遺物が出土する。下位から遺構の落込みがはじまる。

III層 砂粒を多く含み、砂質で粘性がありかたい土質。

第9図 検出遺構平面図

### 遺構について

遺構は2箇所のトレンチで検出された。

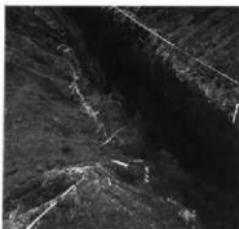
1 トレンチでは住居跡が重複して検出された。平面は楕円形を呈するものと推定され、土層断面では柱穴も確認された。遺構はⅢ層の灰褐色地山層を掘り込んでつくられ、覆土は暗灰褐色を呈する。覆土からは縄文前期と中期の土器や石器が出土しているが、遺構の年代を決めるには至っていない。

2 トレンチでは土坑が3基検出された。

SK 1はトレンチのコーナーで確認され、Ⅲ層の灰褐色土を掘り込んでつくられ、覆土は黒褐色を呈し灰褐色粒子を多く含んでいる。本土坑の底部から縄文前期の一括土器が出土した。SK 2もトレンチコーナで検出され、Ⅲ層を掘り込んでいる。本土坑から縄文中期の土器が出土した。SK 3もⅢ層を掘り込んでつくられ平面は楕円形を呈する。



遺跡近景



1トレンチ 遺構検出



1トレンチ 土層断面



2トレンチ 遺構検出



2トレンチ 土層断面



SK 1 一括土器出土状況

図版7 座須胎遺物

## 遺物について

調査区域の西側で遺物が多く出土し、ほとんどがⅡ層より出土している。

### S K - 1 出土土器（第10図1～15・図版8）

2～4は羽縞文をもち胎土に纖維を含む土器である。2はそれぞれ燃りの異なる原体で施文した結果をもたない羽状縞文である。3～5は燃りの異なる原体で羽状や菱形の文様を施している。これらは大木1式土器に比定される。

1は口縞部が外反し胴部との間がやや屈曲をもち胎土に纖維を含む土器である。4つの小波状をもつ口縞部には、3本の櫛齒状工具によるコンパス文が4条施され文様体を形成し、体部には単軸縞条体第3類が横位に回転施文されている。また、縞条体による文様は胴下半部から底部付近にかけても所々に施文される。8は口縞部破片、9～11は体部破片で1と同一個体と考えられる。12は口縞部破片で単軸縞条体第3類が横位に回転施文された土器。13・14も単軸縞条体第3類が横位に回転施文された土器。15は所謂「網目状燃糸文」とよばれる単軸縞条体第5類が横位に回転施文された土器で、いずれも胎土に纖維を含む。これらの土器は大木2a式土器に比定される。

6は口縞部、7は体部の破片で胎土には纖維を含む。L Rの単節縞文を横位に施文している。大木2a式土器に含まれる土器であろう。

### S K - 2 出土土器（第11図16～21・図版9）

16・17は燃りの異なる原体で施文した結果をもたない羽状縞文が施された土器で、胎土に纖維を含む。大木1式土器に比定される。

18～21は単節縞文を地文とし、隆帯と沈線による渦巻や梢円文が施される土器である。大木9式土器に比定される。

### I トレンチ出土土器（第11図22～23・図版9）

22は「網目状燃糸文」とよばれる単軸縞条体第5類が横位に回転施文された土器で胎土に纖維を含む。大木2a式土器に比定される。

23は胎土に纖維を含む体部破片であるが、一般的に見られる斜縞文とは筋の間隔が異なっている。さらに筋のなかには細かい筋が観察されることから、所謂「組織縞文」が横位に施文された土器と考えられる。前期前半に位置付けられる土器である。

### 2 トレンチ出土土器（第11図25～34・12図35～48、図版9・10）

25は口縞部破片で胎土に纖維を含む。口縞に沿って細い沈線が施され、その下には3本の櫛齒状工具で菱形状の沈線が施される。前期前半の土器と考えられる。

26、28～33、35～44は単節または複節斜縞文を地文とし、隆帯と沈線による渦巻や梢円文が施される土器。27は単節縞文を地文とし、口縞下位に1条の磨消が見られる土器である。34・45は間隔の狭い櫛齒状工具により縦位に施文された土器。46～48は単節縞文が縦位に施された土器。いずれも大木9式土器に比定されよう。

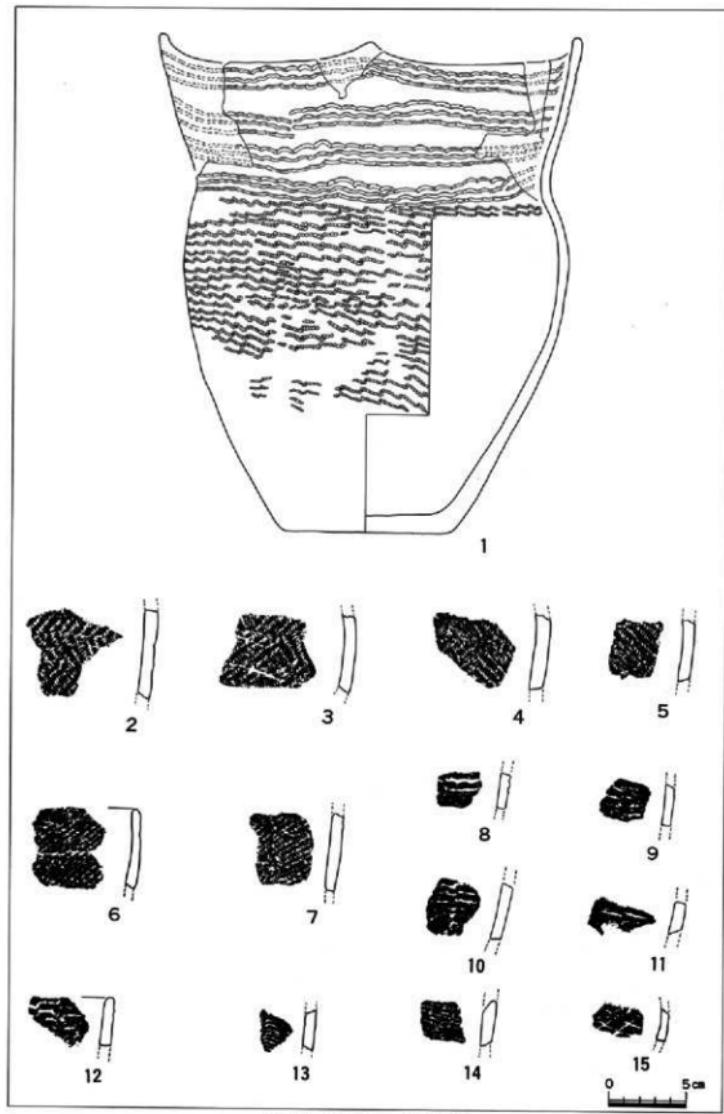
### T P - 33 出土土器（第12図49）

胎土に纖維を含む口縞部破片。単軸縞条体第5類が回転施文された土器で大木2a式土器に比定される。

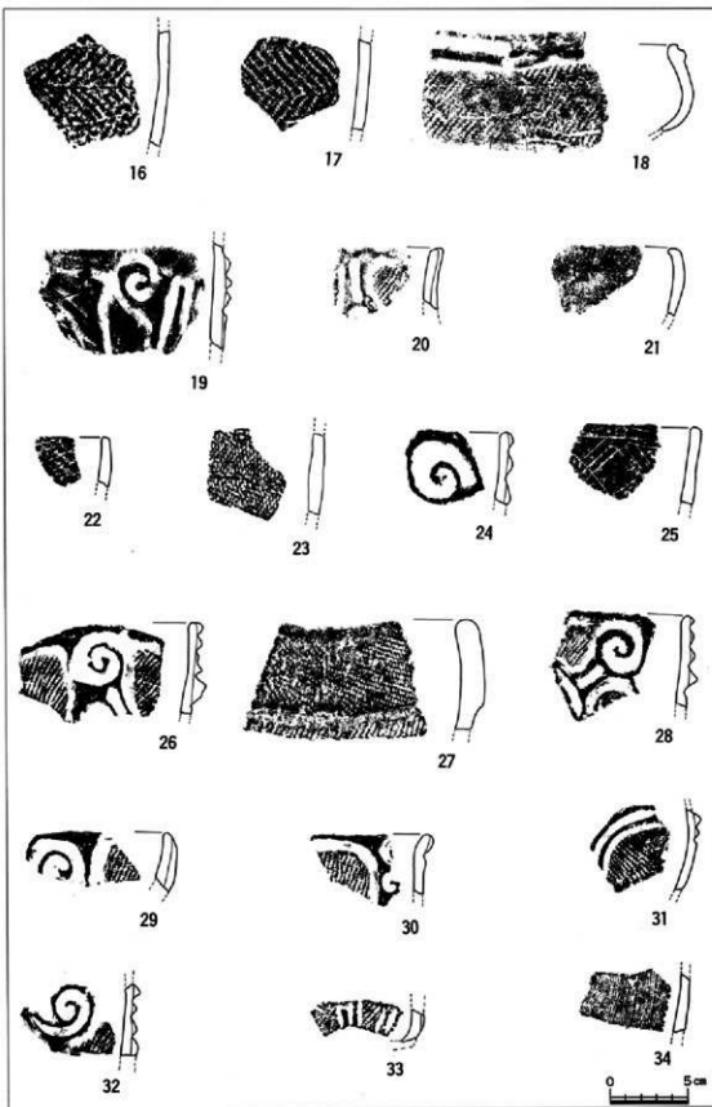
### T P - 44 出土土器（第12図49・図版10）

壺形を呈する土器で、口縞部は無文で帶部には単節縞文が施される。時期は不明である。

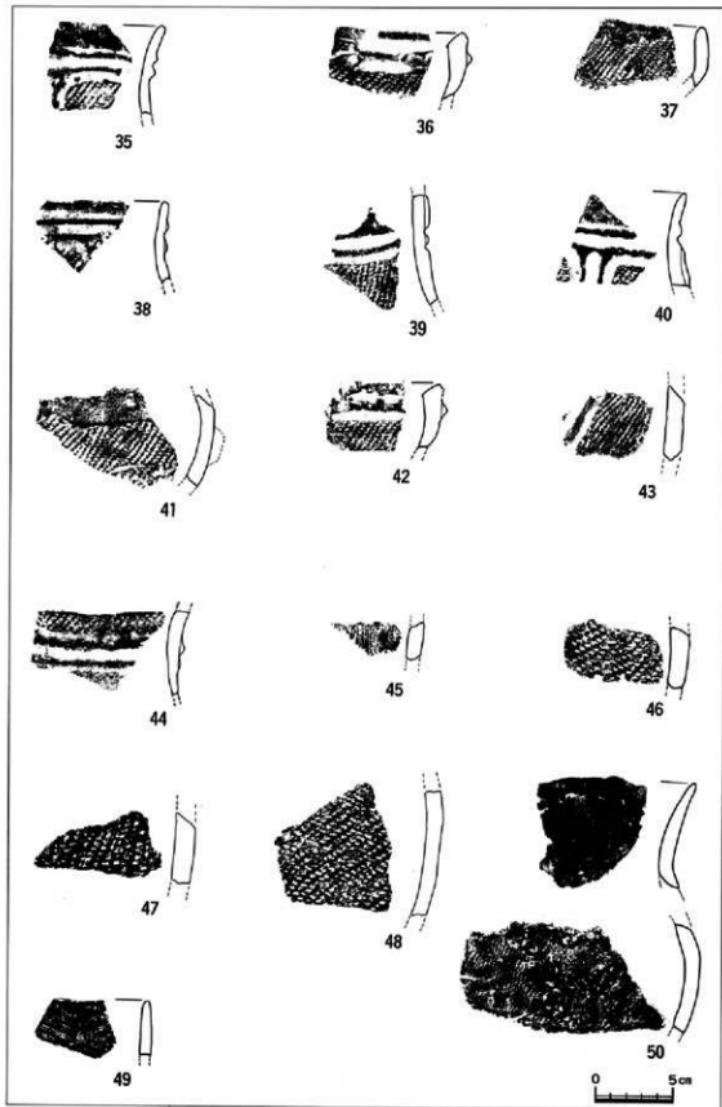
以上のことから、座須脇一帯は縞文前期前半と中期後半の時期を中心に営まれた遺跡である。



第10図 土器実測図・土器拓影図



第11図 土器拓影図



第12図 土器拓影図・石器実測図



SK-I出土土器



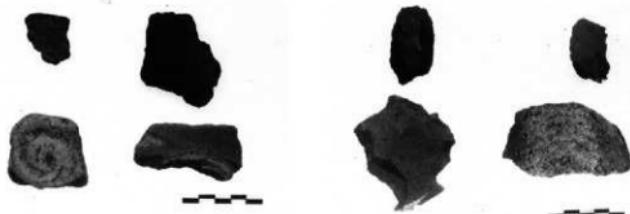
SK-I出土土器

図版8 座須脇遺跡出土遺物



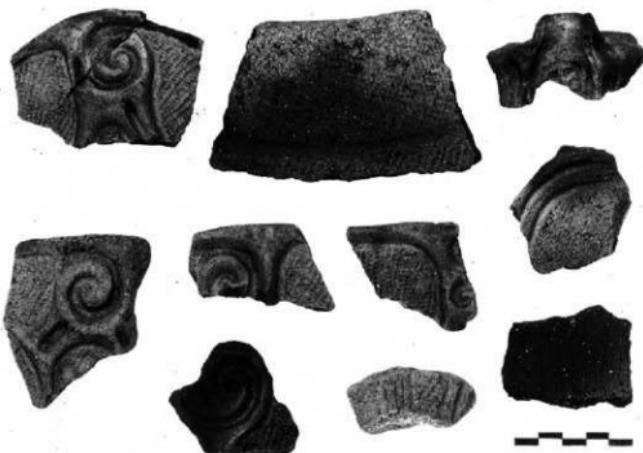
SK 1 出土土器

SK 2 出土土器



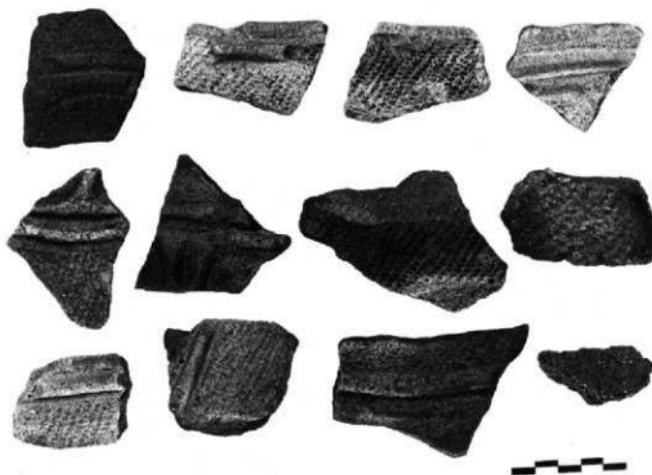
1 トレンチ出土土器

1 トレンチ出土土器

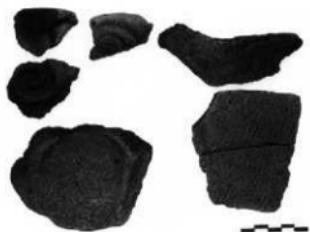


2 トレンチ出土土器

図版 9 庄須駒遺跡出土遺物



2 トレンチ出土土器



2 トレンチ出土土器



2 トレンチ出土土器



TP18出土石器



TP47出土土器

図版10 座須賀遺跡出土遺物

## 8. 城館遺跡

逆川上流の伊佐沢地区の北部、大石地区に位置する戦国時代の山館である。大石地区はかつて洞雲寺を中心に宿場町として栄えたところである。現在、山の神地区と本地区を結ぶ逆川沿いの道路は明治時代に本格化したもので、それ以前は上地区から峰ヶ沢経由が主要道路であったという。周囲には城館遺跡に係わる遺跡が多く見られ、当時大石地区が重要な地域であったことがうかがわれる。

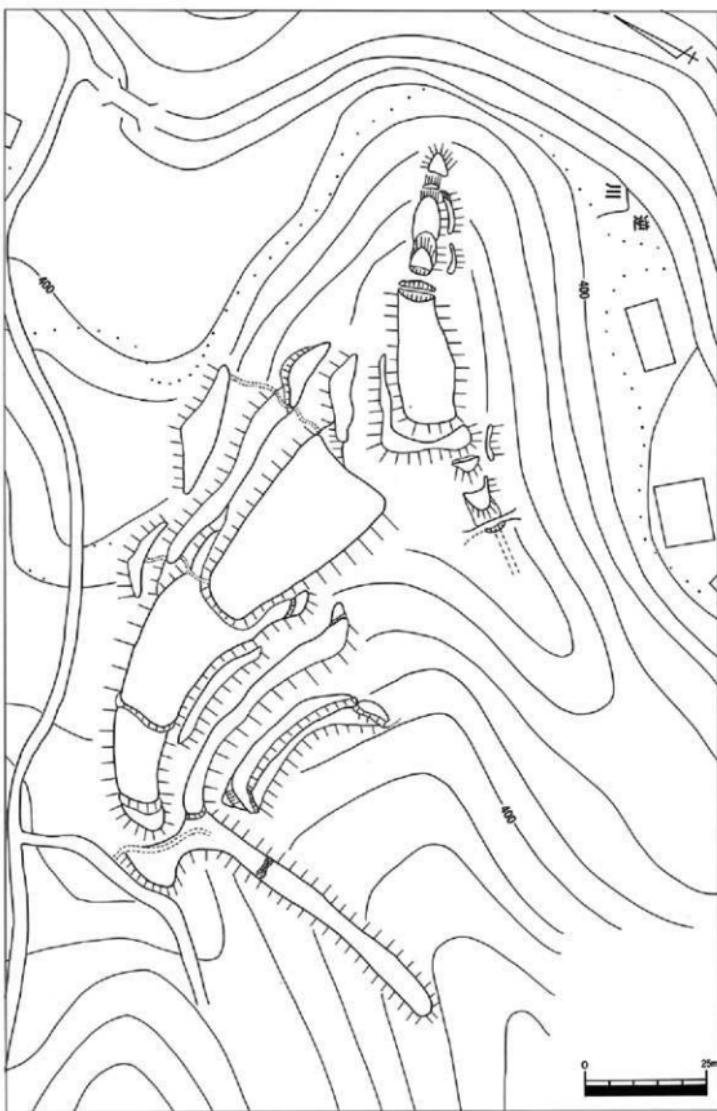
この度は、遺跡台帳の整備を目的に縄張図の作成にあたった。

廻館は洞雲寺の西側約500mの地点、標高425mの山頂にあり東西80m南北160mの規模をもち、東側は急斜面となり逆川に至り北側は上地区に至る旧道が通る。山頂部は25×10mの規模で曲輪が築かれ、その北側を帯曲輪が巡る。南西部は長さ8m幅4mの堀切が築かれ、先端は4箇所のテラスが連なる。また、旧道沿いに最大のもので長さ40m幅20mの曲輪をはじめ三段構築を思わせるような曲輪が築かれ、さらにそれらを囲むように長さ20~50m幅3~5mの帯曲輪が二重から三重巡っている。特に西側の帯曲輪間の高低差は高いところで3mにも達する。

本遺跡の周囲には200m×50mの範囲に城館遺跡が5箇所存在している。戦国時代、伊達氏と最上氏のあいだに軍事的緊張が生じた場合、伊佐沢地区の西を流れる最上川を横切ることなく行き来できるには絶好の通路と考えられる。限られた範囲に城館遺跡が集中して存在する理由も地理的条件からくるものであろう。



図版II 廻館遺跡遠景



第13図 薩摩縄張図

## 9. 八幡館遺跡

長井市街地の東端、長井橋の東側に位置する。八幡山一帯は通称「外田山」と呼ばれ石段を登ったところに八幡神社が奉られて、山の中腹は桜の名所として古くから市民に親しまれているところもある。山頂の標高は310mを測り長井市街地はもとより、隣接する地域の町並みが一望できる。また、尾根沿いに東に向かうと、伊佐沢地区を通り最上川を渡らずして南陽市に達することができる。

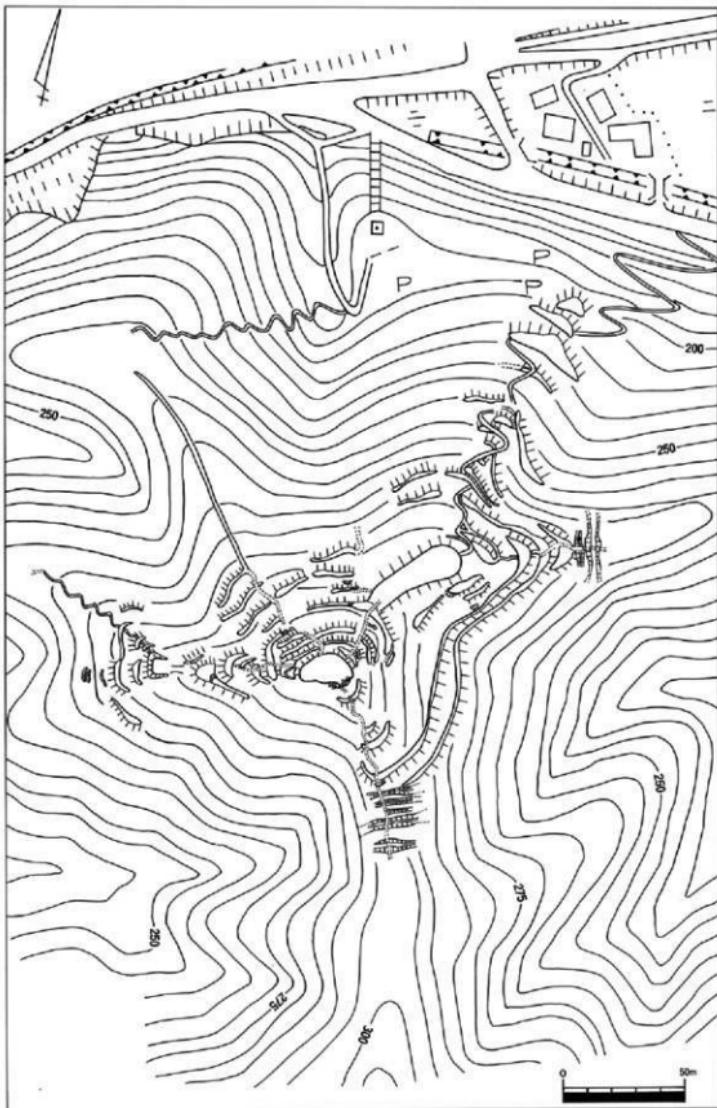
この度の調査は、遺跡台帳整備の目的で縦張図作成にあたった。

本館跡は山頂を中心に東西220m、南北220mの範囲におよぶ。遺構の分布は山頂付近に1箇所、北西、東、南にのびるそれぞれの尾根沿いに1箇所ずつ見ることができる。山頂部は10×20mの曲輪を中心に長さ10~24m幅1~3mの帯曲輪が南北斜面に築かれている。また、北東側では長さ約110m、幅1~3mの帯曲輪が2箇所、東尾根と北西尾根を結ぶ連絡道のように築かれている。北西尾根には山道交錯しながら帯曲輪が見られ、標高が低くなるにしたがい幅が広くなり、麓付近ではテラス状の遺構となる。北尾根には2箇所に掘切が構築され深いところでは2mに達する。また、東尾根にも4箇所堀切りが構築されている。

以上、概略を述べてきたが、本館跡の特徴は、帯曲輪がほぼ等高線沿いに築かれそのほとんどが西斜面に集中して見られることである。北西南に眺望が効き、遺跡の西側を北流する最上川を一望できる地の利を最大限活用した八幡館は、西斜面に対しもっとも注意力を払う必要があったものと思われる。



図版12 八幡館遺跡遠景



第14図 八幡鉛錆張図

## 10. 愛宕山館遺跡

伊佐沢地区の南西部、最上川と白川の合流地点から北東に800mの愛宕山山頂に位置する。現在山頂には愛宕神社が奉られ、標高361mの三角点がある。河川の合流地点に遺跡が立地しているため眺望が効き、置賜全域が視界に入るほどである。近くには樹齢千年を越えると伝えられる国指定天然記念物「伊佐沢の久保ザクラ」をはじめ、戦国時代の城館遺跡や石碑などが伝わっているところでもある。

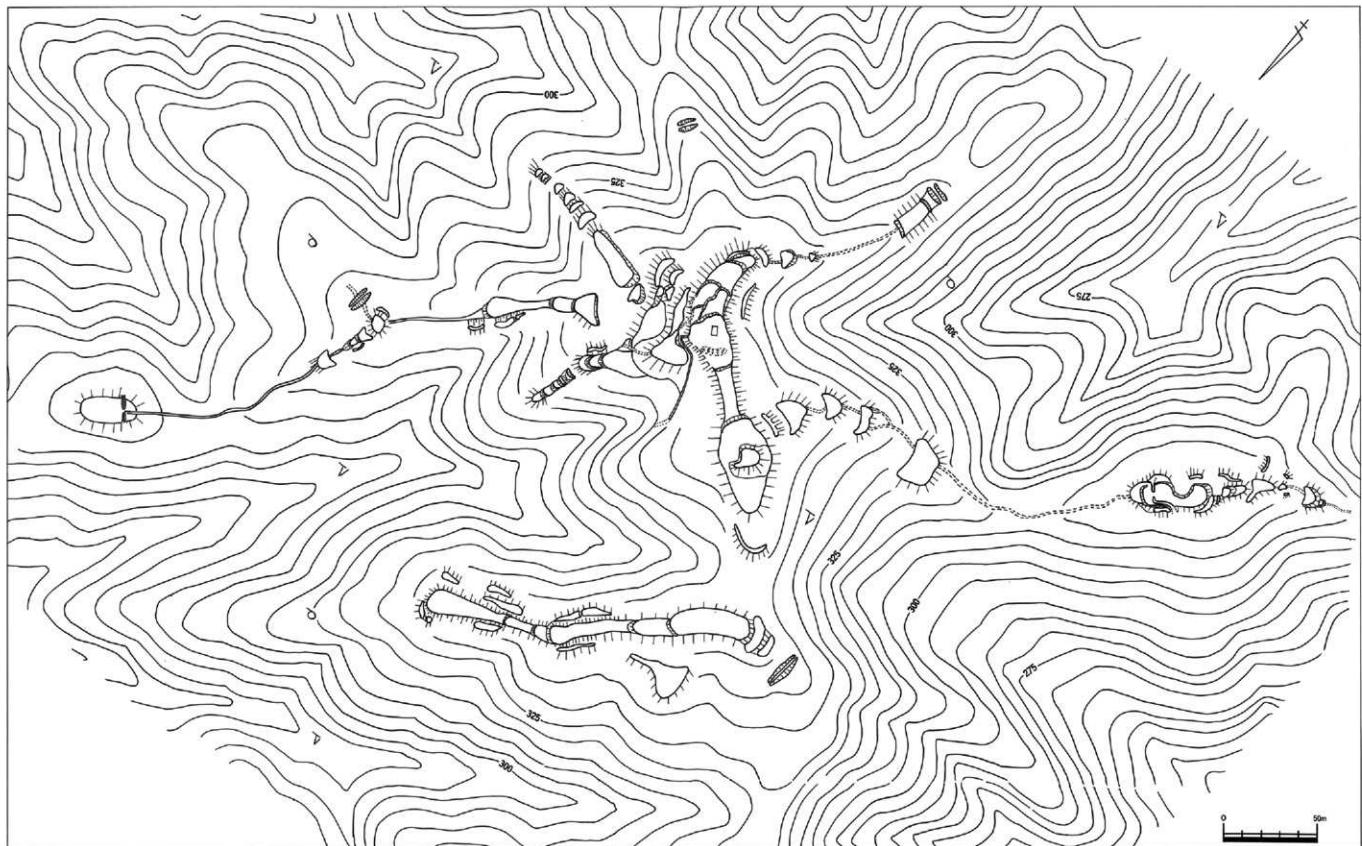
本館は愛宕山頂を中心に東西700m、南北350mの範囲におよぶ大規模な遺跡で、遺構は山頂付近とそこからのびる尾根上に見られる。

愛宕神社周辺は30×20mの曲輪が築かれ、そこから南西方向に数段の小規模な曲輪が段差を有し連なっている。東側は尾根に沿って曲輪が点在し、堀切を最後に遺構が見られなくなる。三角点のある箇所は方形の壇状を呈し二段構築となる。西側は急峻な斜面となり、山道沿いに曲輪が築かれ、尾根平坦部では東西方向に曲輪が複雑に組合わさって見られる。遺跡北側は長さ6~43m幅5~13mの曲輪が連なり東西200mの範囲におよぶ。

以上館の概略を述べたが、当伊佐沢地区には館跡に係わる遺跡が多くみられ、現在まで平地の館が5箇所、山地に11箇所を確認している。戦国期の文書によると長井市一帯は肥沃な土地柄で穀倉地帯であったという。伊達氏身内の争いや近隣の最上氏や鶴貝氏との摩擦にそなえ、地形的にも有利な当地域に多くの城館遺跡が築かれたものと思われる。数少ない中世の遺跡を調査するうえで貴重な存在である。



図版13 愛宕山館遺跡遠景



第15図 爽石山塊 地質図



主峰部（南側から）



主峰部（北側から）



主峰部東側



堀切遺構



主峰部西側

図版14 愛宕山館遺跡

---

**長井市埋蔵文化財調査報告書第10集  
市内遺跡発掘調査報告書(2)**

平成6年3月18日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会  
山形県長井市ままの上5番1号  
TEL 0238 (84) 2111

印刷 ダイヤ印刷所  
山形県長井市高野町一丁目6-20

---